

一支国博物館

一支国博物館は紀元前 200 年頃から 7 世紀頃までの杵岐とアジア大陸との交流の歴史を伝える。原の辻を首都とする王国から、大和朝廷の朝鮮半島への進出の足がかりとなった時代までが展示されている。

古代集落「原の辻」を見下ろす丘の上に建っている当館の建物は黒川紀章（1934-2007）によって設計された。屋上テラスや展望タワーからその全貌を見ることができる原の辻遺跡の自然な延長線上にあるようにデザインされている。

常設展ではまず、3 世紀の中国の歴史書『三国志』の一部である『魏志倭人伝』のテキストに焦点を当てた没入型の展示が行われる。この『魏志倭人伝』には、中国の使者の日本列島への旅の記録という形で、杵岐について初めて記述されたものが含まれている。この序章に続いて、古代の杵岐と原の辻の生活を映像で解説し、上映後はシアタールームから集落跡を見ることができる。

シアタールームからは原の辻遺跡や杵岐の古墳からの出土品を中心に展示した回廊を経て、メインの展示室へと続く。廊下の展示品の多くは実際に手に取ることができ、子どもたちにも見やすいように低い棚に置かれている。

展示の中心は、現在の杵岐の住民の顔を模した人物を配した原の辻の生活ジオラマだ。魚貝の採取や竪穴住居の建設、王宮での儀式などが描かれている。また、波除けのために両側に板を垂直に取り付けた準構造船と呼ばれる船の模型も展示されている。杵岐の商人たちはこのような船で朝鮮半島や九州に渡り、海産物や農作物を道具や陶器、武器などと交換したのだ。

博物館では年に 4～5 回の企画展を開催している。また、収蔵庫の一部は大きな窓から見ることができ、館員が遺物の洗浄や修復を行っているホールも覗くことができる。長崎県の考古学研究の拠点である長崎県埋蔵文化財センターが同じ建物に併設されている。